日本々國民に與ふ

臺灣　蔡培火著

一　日本々國の同胞に告ぐ

私は三百八十萬臺灣人の一員であつて、茲に、日本々國六千萬同胞に對し、心より告げたいと思ふ。私は、異民族たる諸君を敢て同胞と呼ぶ。が併し、これは單に同一國籍を有するの爲めではなく、相互に人格を具し、切に平和と自由を愛好する人間同志なればと思うて、斯く親愛して呼びかけるのであ

る。然り、諸君は私の同胞である。私は茲に於て、同胞たる諸君と、深切に、語らむと欲するものだ。蓋し、今日は互に語るべき機運に到達したと思ふからである。今までも、私は語らざりしにあらず、唯だ、直接諸君と語らざりしのみ。私は、私の同志と共に、諸君の支配階級にして、また私等の支配階級たる人々に對し、十年以來、進んで胸襄を開いたところ、殆んど一顧も與へられざりしのみか、反つて、その怒に觸れて、酷い目に遭された。若し、形勢が從來の通りならば、私は、語るの銀よりも、沈默の金を、餘議なく、選ぶべきであらう。幸に機運が到來して、本國に於ては、普通選擧制が既に實施せられ、諸君は不名譽なる被支配の地位から一躍して、私達の支配者の地位に立つ時となつた。被支配者同志であつた諸君が、將に私達の支配者として、悠々と立ち振舞はむとする時代となつたのだ。諸君の得意や誠に天を冲く程であらう。私は諸君の前途、諸君の新生涯を祝すると同時に、諸君が過去に於て、自ら嘗めた被支配者としての苦味、慘味をお忘れなきやう切に祈る。蓋し斯くあつてこそ、諸君の勝ち得た榮譽ある地位が、始めて諸君の前途を大となし、諸君の將來を價値つけると思ふのである。

若し不幸にして、諸君は、全然立身出世の芳醇に淘醉し、過去の逆境不遇を一朝の夢として、雲煙過眼に付し、前に、諸君が切齒して咒詛した諸君の支配者の非道なる經綸に加担し、成り上りの新支配者たる振舞ひを以て、舊同病者たる我々に向はむか、其の時、私はまた何をか語らうよ。私は、諸君に對する滿腔の期待を拋棄するであらう。而して、人格を有する人類として

の權威を傷つけられないやうに、我々は別個の進路を求むるであらう。何故なれば、諸君の豹變によつて、從來の少數特權階級に依り、左右せられた帝國主義の日本が、正身正銘の大帝國主義國となるからである。

噫！諸君、事實あるべからざる、不幸な假定の上に立てた右の如き臆測を、お互に、露程も抱いてはならない。私は心より大聲して、同胞よと諸君に呼びかける、而して、私の滿腔の思ひを諸君に告げ申さう。諸君、乞ふ、私と同樣の心情を持つて、誠意ある耳朶を私の言に向けられむことを。

二　唯だ不思議な運命のみ

一千八百九十五年、即ち明治二十八年の四月十七日、日清戰役の馬關媾和條約で、臺灣は滿清朝廷の手より日本帝國の屬領として、割讓された。世界地圖に於ける臺灣の染色は斯くして變つたのであつたが、これは、然し、單に日清兩國間に於ける勢力爭ひの結果に依つての變化、我々臺灣民衆の腦裡には唯だ不思議な結果、不思議な運命としか印象がなかつたのだ。亡國とか屈辱とか、はたまた被征服とかの感じは、我々多數の臺灣島民には毛頭もない。我々の祖先、多くの者は、明末の志士鄭成功に從つて、臺灣の開拓者として、漢土より渡臺したもので、我々には清朝は何ものぞ、日本は、また元